

ARTRAMBLE

学芸員の視点1	24
「美術の中のかたち」一手で見る造形 遠藤薫 眼と球を振りかえって	— 武澤里映
学芸員の視点2	46
Perfume COSTUME MUSEUM	— 橋本こずえ
ショート・エッセイ	6
「チャンネル14 吉本直子 いのちをうたう — 衣服、痕跡、その折り」のこと	— 遊免寛子
トピックス	7
館長と一緒に始動 2023年度コレクション展Ⅱ 特集「Welcome! 新収蔵品歓迎会」関連事業 チャンネル14 関連イベントのご報告	
美術館の周縁	8
それぞれの、仲治への旅	— 尾崎登志子

作者本人とこの作品の2年前に結婚した重子夫人、前年4月に生まれた愛児・泰弘を描いたものです。

1914（大正3）年に東京美術学校を卒業し大阪に帰って以来、小出楯重は文展への入選を目指し、家業に就かず絵を描く生活を家族から許されてはいましたが、自前のアトリエは持っていません。奈良公園内の宿に泊まったり、自宅近くの寺に間借りしたりして制作していたのですが、結婚し子供が生まれたのを機に、アトリエに使える部屋のある家を探したところ、日本画家・北野恒富がいた大阪市南区鍛冶屋町の家があくことになり、ここへの引っ越しが済んだのが1919（大正8）年の2月初旬であることが書簡その他から分かっています。重子夫人生前中に小出の初期作品を調査

した研究者、岡畏三郎は、引っ越し完了の少し前からこの家に入居し制作をはじめ、最初に着手したのが本作ではないかと推測しています。そうすると、煙草をくわえてこちらを見つめる小出の表情に、はじめて一家を構えた心情を読み取りたくなります。

小出は、本作の次に静物画を完成させたあと、再度自身と妻子を一回り大きな画面に描きはじめます。構図は本作とそう変わりませんが、幾分戯画化が強まったように見える《Nの家族》（大原美術館蔵）で二科会樗牛賞を得、一躍名前が知られることとなりました。

（西田桐子／当館学芸員）

コレクションから



小出楯重（1887—1931）

《芸術家の家族》

1919（大正8）年

油彩・布

64.0×79.5cm

令和4年度 公益財団法人伊藤文化財団寄贈

「美術の中のかたち—手で見る造形 遠藤薫 眼と球」を振りかえって

武澤里映

今年で33回目を迎えた「美術の中のかたち—手で見る造形」展。作品に触れて鑑賞できる本シリーズは、視覚に障がいのある方により美術を楽しんでいただくとともに、視覚に重きをおいてきた美術鑑賞に再考を促すべく始められ、現在まで継続的に続けられてきた。

今年は、主に染織をはじめとする工芸技法による制作を行う、新進気鋭の現代美術作家である遠藤薫氏（1989-）に展示を依頼した。様々な芸術祭で活躍を続けるその作品と美術館は必ずしも相性のよいものではなかったが、最終的な作品は美術のあり方にまで迫る力強いものであったと思う。

今回展示された《眼と球》というインスタレーションの名前は、一見すると眼球そのものだが、実際には眼と子宮という2つの臓器を象徴している。立体視を可能にし戦いを効率化した眼と赤子を産み落とす子宮は、殺戮と誕生という、生と死を巡る情景によって引き合わされる。展覧会の準備期間中に出産を経験した遠藤氏は、本シリーズの趣旨とも呼応しながら、自ら探求してきた相反するものが重なる「不二」というテーマについて、2つの臓器との触れ合いの中で思索を重ねた。

その眼と球の重ね合わせを具現化するのが、展示室中央で重力によって下に丸く垂れさがる《Canvas/1945/Hyogo Japan》である（図1）。麻布を専門とする神戸の企業の協力によって使用済のジュート麻を手に入れた作家は、自作した画材を用いてそれに下地を塗り、キャンバスを制作した。キャンバスは、絵の始まりに通過する段階でありながら、視覚が重視されるごとにその存在をなきものにされる布である。それがなければおおよそ絵画は成り立たないのにも関わらず、布地の肌理が目立たないようにその上に絵具が施される。キャンバスという布自体を触る経験とは、絵画が生まれる瞬間に立ち戻り、視覚によって絵画を見るときにはほとんど意識に上らないものの存在を確かめることなのだろう。

あらゆる事物が通過するにも関わらず、しばしば忘れ去られてしまう領域は、出産や子育てといった「見えない」労働に従事する女性たちの経験にも通じている。遠藤氏は作品を制作する中で、視覚に障がいのある、妊娠・出産を経験された方々にインタビューを行った。インタビューした方の言葉にもある「複合差別」¹の状況にしばしば置かれる彼女たちは、自らの視覚のあり方や絵画との関わり、出産や子育てについて様々な語り、社会が求めてくる構造の中で各人がどのように生きてきたかを伝えてくれる。しばしば男性が中心となって担ってきた絵画の創造という領域に、キャン

バスという布地や妊娠・出産という文脈を差し込む遠藤氏の実践は、社会的な構造に関わらず存在し続ける何かを映し出してもいるのだろう。同時にこれは、これまでの遠藤氏の制作の中で掬い取られてきたものでもある。

創造の根本に差し迫ったこの作品はまた、私が展示を担当する際に感じたいくつかの疑問を軽やかに吹き飛ばしてくれた。当初、私が布を主とした作品を展示したいと考えたのは、本シリーズが題に冠する「美術の中のかたち」の多様さを考えたかったからだ。「美術の中のかたち」展では、しばしばつるつるとした堅い彫刻が展示されてきたが、昨今の美術や彫刻がそのような堅いものだけではないことは周知のことだろう。一方で、布の作品が美術館で受け入れられるようになってきた背景には、ポスト・ミニマルなどの芸術実践だけでなく、工芸やフェミニズムアートの豊かな蓄積があることも事実である。それらにはしばしば、近代美術として認められてきた堅牢な彫刻に対峙する姿勢が内包されている。そのような歴史をもつ布という素材を、「美術館」、ひいては「近代美術館」でどのように展示できるのか。

こうした疑問は、布による造形をどのように視覚に障がいのある方に提案できるのか、という問いもまた引き起こした。「美術の中のかたち」展は、企画の構成上、視覚に障がいのある方に美術を提供するという姿勢が根底にある。こうした中で美術館は、何が美術であるか、何を触れさせるべきかを定める役割を引き受け、視覚に障がいのある方はこうした美術館の判断を受け入れる側となる。あらゆる触れる展示に必須のこの構図を否定することはできないが、この中で、複雑な歴史を経て美術館でも展示されるに至った布による造形を特別な説明なく「美術」として提供することは、美術館のこれまでのふるまいをなかつたこととして鑑賞者に伝えてしまうのではないか。さらに今回は工芸や手芸という、かつては近代美術に比べ劣っているとされた領域であるから尚更である。つまり私は、これまでの布の造形の歴史を念頭に置いたうえで、視覚に障がいのある方に布の美術作品を提供するのではなく、共に「美術とは何か」と考えられる機会を作ってみたかったのだと思う。

遠藤氏の「キャンバスを作り、使う」という提案は、こうした一連の問いを鮮やかに解消してみせた。具体的なものが描かれていないキャンバスに触るという経験は、視覚に障がいのある人にとっても、自分が従来考えていた絵画とは何だったのかと考えるきっかけになるのではないかと思え



図1 展示風景 撮影：高嶋清俊



図2 鑑賞の様子

た（もちろん、担当者限りでの理想的な見方ではあるが）。木枠、キャンバス、刺繍の裏といった展示室に置かれた様々な事物は、何かを制作する経験がなければ触れることの少ない素材たちである。こうした事物に触れることで、布の面白みだけでなく、これまで自分が美術と生きてきたものの裏側を考えるきっかけになれば幸いである。

一方でこうした私の思考が、視覚に障がいのある方を含め鑑賞者の方々に本当に届き得るものだったのかはほとんど自信がない。上記のような逡巡は、実際に作品に触れる人にとってはほとんど関係のないことでもあるだろう。具象的な形をかたどっていない上に平板な布の触感は、視覚に障がいのある方々から「概念的なものは難しく、わからない」と言われることもあった。アンケートでは絵画について思考を重ねてくれた貴重な意見をいくつかいただくことができたが、今回の展示が非常に難解なものになってしまったことは事実だろう。

そうした中で悔やまれるのは、話す鑑賞のための仕組みを十分に整えられなかった点だ。情報量が多く難しい今回の展示は、話しながら鑑賞するとより面白さも深まる。いつでも取り組めるような仕組みをつくろうと心掛けたが、誰にどのように話しかけるべきかなどはマニュアル化できるものではなく、みながり組みうる形に落とし込むことはできなかった。例年お世話になっている視覚障がい支援団体の神戸アイライト協会の方々に来ていただいた際には、ミュージアム・ボランティアの多大な協力の下、3～4人のグループでそれぞれ対話を交えながら鑑賞していただくことができた（図2）。こうした鑑賞スタイルの一般向けワークショップを用意できなかったのはただ反省するのみである。

また展示を進めていく中で、兵庫県立美術館のこれまでの実践の厚さや、自らの理解の浅薄さを痛感する機会も多かった。「美術の中のかたち」展での蓄積は、作品や作家の選択のみならず、細部にまで行き渡っていることを準備の中でしみじみと実感した。例えば本シリーズのため制作される展示台は、その高さをおよそ60～70cmと低く設定されている。これは、両手サイズの彫刻であれば触って全体を把握できるし、車いすに乗った方であっても不自由なく触る鑑賞が行える高さである。今回はインタビューを引き受けていただいた方が車いすに乗られていたことも重なり、壁面の展示品の高さや台同士の間隔、中央のキャンバスの展示の仕方について、様々な実験を通じ遠藤氏と相談し合い決めていくことができた（図3）。

これまでの「美術の中のかたち」展で作成されてきた低い展示台は、一層多くの人に触っていただけるように気を付けた、今回の趣向にも対応してくれるものであった。

このようにして従来の展示の方法を吟味し、最も多く、最も多様な方々に展示を鑑賞していただけるよう配慮することが、学芸員の役割のひとつなのだろう。今年度から当館では、手話通訳や要約筆記を設ける「ゆっくり解説会」や、小さなお子様をお連れの方なども周りを気にせず鑑賞できる「自由に話せる観覧日」などの新たな事業を始めてきた。「美術の中のかたち」展も含めたこれらの試みは、ある特定の「健常な」身体を求めてきた美術館を変えていくための第一歩である。そして当然ながらこれは、本シリーズが掲げてきた、美術鑑賞のあり方を捉えなおそうとする営みそのものと言えるだろう。反省点も多い今回の経験を糧にして、こうした問題に格闘し続けられたらと思う。

最後に、今回の展示については、作家の遠藤氏を始め美術館内外の様々な方に協力していただいた。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。
（たけざわ・りえ／当館学芸員）



図3 展示作業の様子

1 複合差別とは、複数のアイデンティティが交差する人が受ける差別や不平等を指す。例えば視覚に障がいがある女性は、視覚障がいへの差別と、女性への差別の双方をしばしば受けている。以下を参照。DPI女性障害者ネットワーク編・発行「障害のある女性の困難～複合差別実態調査とその後10年の活動から」2023年

Perfume COSTUME MUSEUM

橋本こずえ



図1 3階会場入口

2023年9月9日から11月26日まで兵庫県立美術館で「Perfume COSTUME MUSEUM」展を開催し、多くの方にご来場いただいた。アートディレクターでデザイナーの吉田ユニ氏による本展メインビジュアルは、会場内外や美術館周辺に設置された看板やバナーとして展開し、道ゆく人の目を惹いた。フォトスポットとして機能した3階会場入口の特大バナーと三角形の装飾は、会場施行のStudio Sawnaの提案で衣装展にふさわしく布で製作され、柔らかな印象を与えたことだろう（図1）。展覧会初日には、メンバーの衣装を模した手作りのコスチュームやPerfumeの衣装を普段着のデザインに落とし込んだ「Perfume Closet」の洋服やコンサートのツアーTシャツを着用した来場者で賑わった。

展覧会場に入ってすぐ、プロローグのコーナーには、2022年の楽曲「Spinning World」と2005年のメジャーデビューの楽曲「リニアモーターガール」の衣装とともに、Perfumeのディスコグラフィーを設置した（図2）。活動や楽曲がキューブに配置されたディスコグラフィーはPerfumeファンクラブの冊子デザインを手がけるデザイナーの芝野健太氏によるものである。Perfumeのメンバー、あ〜ちゃん、かしゆか、のっちの個性をそれぞれに引き出す衣装は、3人のデザインのバリエーションが魅力のひとつである。冒頭2組の衣装は3体がほぼ同型、「リニアモーターガール」のビニールチューブの色やわずかな丈感に違いがあるのみで、「Spinning World」は一部の型紙をメンバーで同じものを使用したというほど統一されたデザインとなっている。しかし、デザインそのものの魅力を伝え、Perfumeの衣装の世界に誘うのに効果的な衣装であった。

第1章では、2005年から2011年までの活動初期の衣装を展示した。この章においては、スタイリストの内澤研氏のスタイリング、そして制作による衣装が多く、既製服が用いられている点も特徴である。内澤氏は、あ〜ちゃんに膝丈、かしゆかにミニ丈、のっちにパンツスタイルという現在までつづくデザインを提案した。会場には、メンバーの名前の頭文字「A」「K」「N」を表記し、誰の衣装であるかを明らかにした。私たちは、毎日、意識的に、また無意識に、自分自身に似合う服を機会や場所に合わせて選んでいる。誰が着用した衣装であるかを考えるとき、私たち自身が身につけているおそらくファッションのリテラシーと呼べるものが鑑賞の手がかりとなったことだろう。

展覧会の記者内覧会の際にPerfumeメンバーが来場し、3人一緒にゆっくりと時間をかけて鑑賞したのも本章である。着用した本人だけではなく、鑑賞者にとっても1着の衣装に対する思い出が大きいであろう初期の衣装の展示には、なるべくゆったりとした空間を確保した。普段はテレビのモ

ニター越しや広いライブ会場の遠くから見る衣装であることから、できるだけ目線の近くへ配置した。また、360度から見るができるように、限りのある空間の中で壁面から離して展示することを心掛けた。また、アーティスト写真やミュージックビデオを多く設置したことで、実際に着用している状態を想像することができた。

第2章では、単独での海外ツアーの開催など、Perfumeの活動が加速していく2012年以降の衣装を紹介した。クリエイティブ集団ライゾマティクスが参加することで、衣装が演出の一部や舞台装置の中に組み込まれていく。本展では、衣装自体が発光する2012年の楽曲「Spring of Life」と、2013年の「カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル」で映像を投写した衣装を一部再現展示した。衣装においては、最先端技術の導入のみならず、Perfumeの3人を象徴する三角形や幾何学模様デザインに大胆に取り入れられ、視覚的な強度を獲得していく時期と考えた。2010年から現在まで、Perfumeのコスチュームデザインを主に担当しているのは、スタイリストのToshio Takeda氏と三田真一氏の2人である。スタイリストでありながらデザインを手がけることについて、Takeda氏は、必要な服がないから作るという姿勢であること、三田氏は、100人スタイリストがいれば100通りのスタイルの提案があるということ、そして、自身の制作活動の幅広さがスタイリストの中では異色であることを教えてくれた¹。衣装制作には、斬新なデザインをする2人に加えて、ミリ単位で型紙を調整する熟練のドレスメイカーの存在も欠かすことができない。

衣装が主役の展覧会であることから、展示の装飾は華美なものとはせず、ミュージック・ビデオの再現は行わない方針をとった。そのかわりに会場では、衣装の美しさを引き出すために布のインスタレーションや、三角形のデザインを強調する立体の装飾を設置した。また、楽曲と衣装が強い繋がりを持っているからこそ、他の衣装の鑑賞の妨げとならないように、会場で楽曲を流すことは必要最低限の数に留めた。

「発想と制作」のコーナーでは、Perfumeの衣装デザインに欠かすことのできない3人のスタイリスト、内澤氏、Takeda氏、三田氏を紹介し、デザインスケッチなどを展示するとともに、ドレスメイカーのSAQULAI, Incと内藤智恵氏からお借りした型紙などの資料を公開した。

第3章に展示した2016年以降の衣装は、これまでの定型が覆されていく時期と位置付けた。曲線のデザインやブリーツの布地の使用、色数の限定や丈の長さの変化に特徴が見られる。動きやすい短いスカート丈だけではなく、膝丈などのバリエーションが増える。2016年の楽曲「FLASH」で採用された立体的な構造のスカートのブリーツは、可動域を確保するだ



図2 プロローグと「Spinning World」2022年



図4 Toshio Takeda氏と三田真一氏



図5 櫻井利彦氏と松丸千枝氏

けではなく、ふわりと広がる布地がダンサーとしてのPerfumeの魅力をさらに引き出す効果を生んだ。

現在進行形の衣装を紹介する本章では、会場の7.2mの天井高を生かす展示方法を採用した。ライブ演出での見え方も考慮し、複数の衣装を高所に設置することとした。美術館における展示物の見やすさと演出効果の両立に正解はないが、お気に入りの衣装が高い場所に設置され、遠く感じた方もおられたかもしれない。

ステージ衣装を特集した最後の第4章では、演出効果や早着替えの工夫を見ることができる。演出効果の大きい衣装は、固く、重くなることもある。踊りやすさや動きやすさとの両立は困難であるが、制作陣は試行錯誤を重ね、また、メンバーが多忙な中でも、少なくともフィッティングを2回行うことで、衣装が完成するという。このようにして、振り付けに支障のない装飾の位置や、布地の切り替え、軽量化が実現される。会場には、Perfumeメンバーが本展のために特別にお気に入りの衣装をセレクトしたコーナーも設け、思い出やその特徴についてコメントをいただいた。衣装を着用した本人たちによるセレクトによって、展覧会の出品衣装のラインナップが補完されたことはたいへん有難いことであった。

本章は写真撮影の可能なエリアとしたが、見晴らしのよい会場であったため、混雑も少なく、ライブ映像も流れていることで、来場者に思い思いに楽しんでいただくことができるスペースとなった。

会期中には展覧会に関連したイベントを実施し、毎週日曜日のミュージアム・ボランティアによる解説会には、各回満席となるほどのお客様にご来場いただいた。当館ボランティアよりも、来場者のほうがPerfumeについて詳しいこともあったかもしれないが、衣装の見どころを懸命に説明する様子が拍手が送られた。学芸員によるレクチャーは、9月16日、10月21日に開催した。10月には多くの方にご来場いただいたため、開催場所を急遽収容人数の多い会場へ変更した。さらに、耳や目の不自由な方など多くの人が展覧会を楽しみきっかけとなるように「ゆっくり解説会」を11月12日に開催し、兵庫県聴覚障害者協会から手話通訳と兵庫県難聴者福祉協会から要約筆記をお招きした。普段よりも時間をかけて行う解説は好評であった。10月14日のこどものイベント「あなたもデザイナー？ つくってみよう！マイ☆コスチューム」には、デザイナーになりたい、Perfumeの衣装が好きだということもたちが参加し、展覧会を鑑賞した後、ミニチュアサイズの独創的な衣装を熱心に制作した（図3）。

また、当初から計画していた通り、記念トークショーを2回実施するこ

とができた。コスチュームデザインを手がけるTakeda氏、三田氏による対談は、多忙なお二人の予定が奇跡的に合い、急遽11月4日に実現したものである（図4）。衣装制作に欠かすことのできない存在の二人が、異なる方向からデザインへアプローチしていることわかる貴重なトークとなった。11月18日には、SAQULAI, Incの櫻井利彦氏と本展の出発点となった『Perfume COSTUME BOOK 2005-2020』（文化出版局刊、2020年）を担当した、「装苑 ONLINE」編集の松丸千枝氏によるトークを実施（図5）。櫻井氏に衣装の制作過程を詳細に説明いただくとともに、多忙な現場で制作をつづける関係者にとっても、これまでのPerfumeの衣装を通覧できる書籍がいかに貴重なものであるかがわかる内容となった。

展覧会を実現するにあたり、衣装を知れば知るほど、1着の衣装が完成するまでに費やされた労力と時間、そして、完成した衣装に向けられた眼差しの熱量に驚くこととなった。Perfumeの活動に対して、衣装を制作してきた人々に対して、そして、その存在に胸を熱くしてきた人々の思いに対して敬意を持って展覧会の準備を行うことを心掛けた。これまでPerfumeを支えてきた人々が納得できる内容でなくてはならないが、一方で、公立美術館で開催する以上、Perfumeを知らない人間にもその魅力を伝えなくてはならない。会期中には、県内外から多くのファッション専門学校に授業の一環としてご来場いただき、可能な限り学芸員レクチャーを行った。コロナ禍以降、近隣の学校団体鑑賞も数多く再開され、受入対応の職員は目の回るような忙しさであった。衣装制作と同様に、展覧会は多くのスタッフにより実現したものである。その一人として、展示に訪れた人々にとって、新しい思い出の始まる場所となることを切に願っている。

（はしもと・こずえ／当館学芸員）



図3 こどものイベント

1 2023年2月14日に東京都内で、Toshio Takeda氏、三田真一氏にそれぞれお話を伺いました。

「チャンネル14 吉本直子 いのちをうたう —衣服、痕跡、その祈り— のこと 遊免寛子

ショート・エッセイ

担当学芸員が今こそ紹介したいと考える注目作家を取り上げ、同時代を生きる作家と来館者とがさまざまな「チャンネル」を通して出会う機会になることを目指す「注目作家紹介プロジェクト チャンネル」。14回目を迎えた今年は、10月28日から11月26日までの約1ヶ月間、アトリエ1からホワイエを会場に開催した。筆者が10年振りに担当したチャンネル展では、以前から注目していた作家のひとりである吉本直子（1972年、兵庫県加西市生まれ）を紹介した。吉本は人が着用した白い衣服を素材として立体作品を制作している。衣服は着用するうちに皺やほつれが出来たり、汗や皮脂が染みこんだりして変化していく。その時、衣服は単なる布を超え、人の痕跡を記録する媒体となる。そこに惹かれた吉本は自らが使用した布を素材とした作品を発表するようになる。やがて自分より他者の記憶により強い関心を持つようになった吉本は、他者が着用した衣服、とりわけその痕跡が色濃く残る白い古着を使用するようになる。方形の型に入れて圧縮し、ポリ塩化ビニールで固めた白いシャツは、型に当たった部分は平らに、反対側には空洞ができる。それらを組み合わせた作品は、まるで大理石のブロックで出来た建造物のようにも見える。しかし近くで見ると衣服であることがわかる。シャツの袖や裾の形がそのまま残されたものもあり、それらは人間の存在をより生々しく感じさせる。その作品は、生きている人の生の証であり、その人がここにいないという不在の可視化でもある。作品の前に佇んだ時、私たちは人間の生と死を感じずにはいられないだろう。

今回はアトリエ1の天井高7m20cmの巨大な壁面に合わせて《鼓動の庭》（2012年）が展示されたが、その余りの大きさと壁面への絶妙な馴染み具合に、もともとこのような壁であると思われた方も現れるほどであった。しかし展示室へ足を踏み入れ近付くと、それが一面のシャツの集積であることに気付く。そして見るものを圧倒するのである。

2019年から新型コロナウイルスのパンデミックの渦中にかけて、吉



鳥の作品の手紙



アトリエ1の展示風景。奥に見えるのが《鼓動の庭》

本は兵庫県の姉妹都市であるオーストラリアのバースを拠点とするダンスカンパニー Co3 と共に新たな作品を生み出した。ワークショップ「The bird makers project」（2019年～）は、人々が自身の思い出のある古着を使用して鳥の彫刻を制作し、その鳥に込めた思いを手紙にしたためるというプロジェクトである。バースに生息する黒い鳥をモチーフとし、吉本指導のもと制作された多様なルーツを持つ千羽を超える黒い鳥と手紙は、2021年に開かれたバースフェスティバルでのダンス公演「Archives of Humanity」の舞台で披露された。大量の手紙で埋め尽くされた壁を背に、黒い鳥の群れが舞う舞台の上で、ダンサーたちは、時に孤立し、うちひしがれ、助け合い、団結して立ち上がっていく。それは、コロナ禍で孤立したコミュニティが直面した危機と、力を合わせて未来に力強く進む人間の姿を想起させた。なお吉本が担当した舞台装置は2022年の「西オーストラリア・パフォーミング・アーツ・アワード」で舞台デザイン優秀賞を受賞した。

実は、今回吉本を紹介しようと思ったきっかけは2021年に姫路市の「ギャラリーランズエンド」で目にしたこのプロジェクトであった。白い古着を使った作品は孤高で厳粛な雰囲気をもと。一方、鳥の作品は親密で愛らしくもあり、これまでの吉本の作風とは相容れないように感じられた。しかしそれが、吉本の作品に奥行きを与え、新たな魅力を引き出しているようにも思えたのである。また、市民とともに作り、変化する展示という点にも魅力を感じ、ぜひ紹介したいと思った。参加者が記す、それぞれの服にまつわるストーリーは、他者が着用したおびただしい枚数の白い服にひとりで向き合い制作を続けてきた長い年月の中で、吉本が知りたいと願ってきた衣服にまつわるリアルな記憶である。なお、1点残念な点をあげるならば、新作を紹介出来なかったことである。吉本によると、新たな作品にチャレンジしていたものの満足のいく出来にならなかったということであった。今回の展示を足掛かりに今後新たな境地を切り開いてほしいと心から願っている。

当初、コロナ禍に命の重さを改めて実感した私たちにとって、アフターコロナの現在、生きる力や命の輝き、希望の光を感じられる場となればと思い、今回の展示を企画した。しかし世界は一層過酷な状況となっている。本展に寄せた作家の言葉で本稿を締め括りたい。

着用者それぞれの生きた瞬間、記憶、歴史を目には明らかではない痕跡としてとどめた衣服。それを素材として制作した立体は、耳には聞こえない叫び、願い、祈りを放っているように思えます。今を生きる無数の人々の生に思いを馳せ、個々の祈りが共生の祈りとなって響く空間を制作したいと思っています。

（ゆうめん・ひろこ／当館学芸員）

館長と一緒に始動

2023年4月に就任した林洋子館長の発案で、美術館をめぐる中長期的課題を識者とともに考えるトークセッションシリーズ「HART TALK 館長といっしょ！」が始まりました。初回となる9月12日には、瀬戸内国際芸術祭の総合プロデューサーの福武総一郎氏をゲストに、兵庫県を含む瀬戸内圏の美術館・芸術祭の連携についてのトークを開催しました。10月15日には、建築史家で大阪公立大学教授の倉方俊輔氏をお招きして、当館を設計した安藤忠雄氏の建築についての対談となりました。11月19日には、当館前身の兵庫県立近代美術館学芸員で、現在は静岡県立美術館館長、東京大学名誉教授である木下直之氏をお迎えして、学芸員時代のお話や、近代美術館から県立美術館への名称変更に関わられた意味や意義、そしてこれからの美術館についてお伺いしました。本シリーズは当館の位置する地域、建築物、そしてその歴史を館長とともにひも解き、未来を考えていく機会となっています。今後の催行については、当館ホームページなどで最新情報をご確認いただき、ぜひ興味のあるテーマにご参加ください。

（橋本こずえ／当館学芸員）



福武総一郎氏



倉方俊輔氏



木下直之氏

2023年度コレクション展Ⅱ 特集「Welcome！新収蔵品歓迎会」 関連事業



「美術館探偵 美術館の“新入り”を調査せよ！」展示室での作品調査
「Ken-Vi スペシャルトーク with 澤田知子」トークの様子

昨年度当館のコレクションに加わった「新収蔵品」を主役に据えた本展。9月28日に開催したこどものイベントでは、コレクション展Ⅰで好評いただいた「美術館探偵」シリーズ（前号トピックスを参照）を引き継ぎ、「美術館の“新入り”を調査せよ！」と題して、参加者が新収蔵品にまつわる様々な謎を調査する鑑賞プログラムを実施しました。一足先に展示室に潜入していた探偵（に扮した学芸員）が残したヒントを手掛かりに、参加者は5つのミッションに挑戦。時に「名探偵！」と呼びたいほどの推理力をかせてくれた参加者に、我々スタッフも舌を巻きました。

12月2日には、作家の澤田知子さんをお招きし、「Ken-Vi スペシャルト

ク with 澤田知子」を開催。展示中の新収蔵作品、90年代に一世を風靡した「ガングロギャル」にメイクアップした《cover/C》（2002年）と、女将、警察官、バスガイドなど、様々な職業人に扮した《Costume》（2003年）について、作品の前でお話いただきました。撮影の裏側やエピソードが伺える貴重なトークに、参加者も熱心に聞き入っていました。

そのほか、恒例の学芸員による解説会（10月28日、12月2日）に加えて、手話通訳と要約筆記付きの「ゆっくり解説会」を、特別展・チャンネル展と合同で実施しました。

（林優／当館学芸員）

チャンネル14 関連イベントのご報告

開幕初日の「アーティスト・トーク」では、吉本直子氏に自らの作品とその制作背景、他者が着用した白い古着を使用する理由、現在の展示作品等について語っていただきました。つづく11月5日にこどものイベント「ザ・バード・メーカーズ・プロジェクト—同じ空の下で—自分の服で鳥を作ろう！」を開催。思い出のこもった服をリメイクして鳥の彫刻をつくる本プロジェクト。1日かけて作品の鑑賞と制作にじっくり取り組んでもらいました。そして11月11日には友の会との共同事業として大人版のワークショップを開催しました。いずれのイベントでも個性豊かな鳥の作品が生まれ、鳥にまつわる手紙と共に、チャンネル展に追加展示しました。黒い鳥の群れに加わったカラフルな鳥たちは、アフターコロナの希望を感じさせました。更に、会期中にはミュージアムホールの大画面にてダンス映像を紹介する「上映会」や「ゆっくり解説会」を開催。見たり、聞いたり、つくったりとイベントが盛りだくさんの展覧会となりました。

（遊免寛子／当館学芸員）



ワークショップの様子。講師の吉本直子氏



ホワイエの展示風景▶

● 編集後記

● 同時期に開催された展覧会には、いずれも布や衣服にまつわる作品が出品されました。Perfume展では演出とともに進化する最先端の衣装を展示する一方、チャンネル展では様々な人々の衣服に残された歴史や痕跡が主役となりました。そして、コレクション展では、服装によって多種多様な人物に扮する澤田知子の写真作品をはじめとした「コスチューム研究会」というテーマが設けられ、さらに、「美術の中のかたち」展においては、普段は表に現れることのない絵画作品の支持体の布に焦点が当てられています。（橋本）

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.81

2023年12月26日発行
編集・発行：兵庫県立美術館
〒651-0073
神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1
印刷：有限会社リーストワーク

それぞれの、仲治への旅

尾崎登志子



逗子海岸（2023年9月筆者撮影）

美術館の周縁

今年2023年、日本写真史を代表する作家たちの展覧会が、全国各地で開催された。たとえば、「[前衛]写真の精神:なんでもないものの変容」(千葉市美術館など計4館を巡回)、「森山大道:光の記憶」(島根県立美術館)、「牛腸茂雄写真展“生きている”ということの証」(市立伊丹ミュージアム)など目白押しであった。かくいう当館で開催中の特別展「生誕120年 安井仲治—僕の大変な写真」も、戦前の写真界で名を馳せたアマチュア写真家・安井仲治のおよそ20年ぶりの回顧展だ。数ある展示のなかでも筆者が目撃していたのが、神奈川県立近代美術館葉山館で行われた「挑発関係=中平卓馬×森山大道」展である。幸い開幕寸前に訪れることができたため、ここに所感を記したい。

中平卓馬(1938-2015)と森山大道(1938-)は、1964年に先輩写真家・東松照明の紹介で知り合う。以後、二人はおなじ逗子に生活の拠点をもち親交を深めあった、いわばお互いにとって相棒のような存在であった。展示会場では、まず同人誌『PROVOKE』や60年代の森山の代表作である『にっぽん劇場写真帖』に収められたイメージの数々が目に飛び込んできた。興味深かったのが、あわせて会場に展示されていた『アサヒカメラ』や『カメラ毎日』など当時の写真雑誌だ。時代だろうか、インクがこぼれりと盛られた誌面は半ば黒くつぶれており、プリント以上にある種の凄みを感じさせる。その一方で、会場の一角に展示された芍薬の花を撮影した写真が私の目をとらえた。一見何てことはないスナップのようだが、静謐で凜とした、何かを振り切ったような印象を与える一枚である。

森山は1972年に写真集『写真よさようなら』を刊行した後、しばらくの間制作と距離を置くこととなる。しばらく「出口ではなく、入口の見えない」状況に陥った森山を救ったのが、安井仲治のコンタクトプリントであった。写真評論家・福島辰夫の知遇を得て、安井が生前カメラに収めた膨大な量のネガイメージに触れた森山は、「写真でこんなに自由なものだったんだ」と感じたという¹。スランプを脱しつつあった森山は、ふと何気なく撮った未現像の芍薬の花を思い出し、「どうしてもその花の写真を何とかしたくなった」²。そしてその一枚を巻頭に収めた写真集『光と影』を1982年に出版し、その5年後には安井へのオマージュである『仲治への旅』を刊行した。

会場では森山の《光と影》シリーズの横に、中平卓馬の『Adieu à X』に掲載された作品群が並んでいた。印刷物からは想像もつかない、やわらかい諧調が印象的であった。会場では数少ないオリジナルプリントであったのもあるだろう(出品作品の多くは本展のために新たに制作されたモダンプリントである)。1977年以降、中平は記憶障害を患い写真家としての活動の制限を余儀なくされ、自宅周辺の光景をカメラに収めるようになる。そのような身体的ハンディに起因する遺言が、透明感のある日常的な

ショットにつながったのかもしれない。この時期の中平の風景写真は、どことなく1930年代後半の安井仲治を彷彿とさせる。中平の死後、森山は《Nへの手紙》を発表し、写真というメディアを通じて彼の世へ交信を送った。同名のエッセイを読むと、二人の関係性が微笑まじいと同時にうらやましくも感じた。安井仲治もまた、浪華、丹平両写真倶楽部の写友たちに囲まれ、互いに刺激しあいながら制作活動を行っていた作家であった。安井にとっても、森山にとっても、まさに「挑発関係」こそが各々の表現を高めていったのではないか。

森山が安井の写真に強く惹かれた理由が、その「アマチュアイズム」にある。「写真は、全き個人の領域内での営為でしか絶対にあり得ないと思うべくにとって、安井仲治の写真はその個人の領域のギリギリまで蚕食しつつした果てのものであるからこそ、すぐれて〈人間的〉だと思えるのだ」³。たしかに、安井仲治という巨大な山嶺の裾野はとてつもなく広い。筆者はまだその麓に足を踏み入れたばかりである。今回の安井仲治展は、先人たちの分厚い研究の蓄積の上に、新たな地層を重ねることができればと携わった企画だ。森山大道のように、若い作家たちが仲治の作品を見て、明日の写真についての示唆を得るだろうか。それぞれの「仲治への旅」を思い描くことはあるのだろうか。そんな風に思いを馳せながら、逗子の海を眺め、「珠屋」のアイスコーヒーをすすり、横須賀線にゆられて帰路についたのだった。

(おさき・としこ/当館学芸員)



会場風景(森山大道《Nへの手紙》の展示、筆者撮影)

- 1 森山大道「仲治へのシンパシー」『déja-vu』12号、フォトブラネット、1993年4月、p.44。
- 2 森山大道「花の行方」『写真時代』1982年11月号。「挑発関係=中平卓馬×森山大道」展図録のpp.240-242に再録された文章を参照。
- 3 『安井仲治 モダニズムを駆け抜けた天才写真家』(1994年)に寄せられた森山大道のコメントより引用。